

## オウトウ新品種 ‘甲斐オウ果 6’

新谷勝広・太田佳宏・竹腰 優<sup>1</sup>・雨宮秀仁・佐藤明子<sup>2</sup>・三宅正則<sup>2</sup>・富田 晃・手塚誉裕

<sup>1</sup> 現 専門学校山梨県立農業大学校

<sup>2</sup> 現 山梨県峡東農務事務所

キーワード：オウトウ，極早生品種，甲斐オウ果 6

### 緒言

山梨県は，オウトウ経済栽培の南限と言われ，早生品種の割合が他の産地より高い特徴がある。首都圏や中京圏からも日帰り圏内にあることから 1990 年代以降，観光摘み取り園の割合が飛躍的に伸び，栽培面積に占める観光摘み取り園の割合は 30%を超える<sup>1)</sup>。観光摘み取りでは，収穫期間後半になると他産地やモモなど他樹種との競合が生じることや，6 月中下旬になると高温傾向にあり果実が日持ちしないため，早期に収穫できる極早生品種の開発が望まれている。また，系統出荷においても同様の傾向が見られる。

山梨県果樹試験場では 1988 年より本格的にオウトウの交雑育種を開始し，これまでに‘高砂’と‘佐藤錦’の間に成熟する‘甲斐オウ果 1’を育成した<sup>2)</sup>。2002 年からは，極早生で食味が安定し，着色性に優れる品種の開発を目指し交雑を行ってきた。

その結果，‘オウトウ山梨 6 号’を選抜し，2014 年に品種名‘甲斐オウ果 6’として品種登録を申請し，2015 年に品種登録された(登録番号第 24629 号)。ここにその育成経過と特性について報告する。

### 育成経過

‘甲斐オウ果 6’は，晩生で着色良く大玉で食味に優れる‘紅てまり’を種子親とし，極早生品

種の‘豊錦’を花粉親として交雑し育成した(第 1 図)。

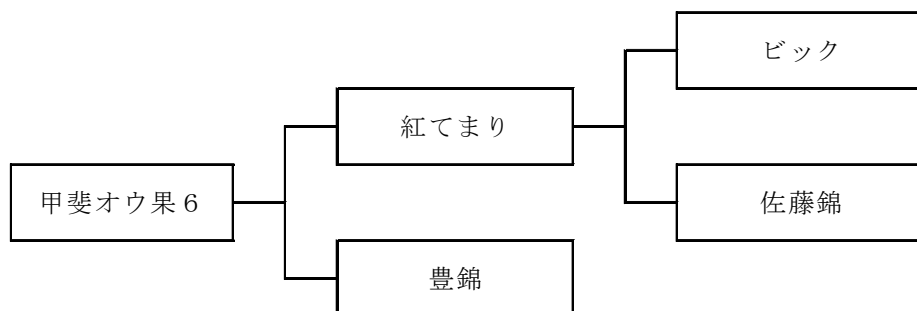
交雑は 2002 年に山梨県果樹試験場圃場(山梨市江曾原)で行った。得られた種子は 5℃の冷蔵庫で 7 ヶ月間貯蔵後に除核播種し，ガラス温室内で養成した。2003 年 4 月に苗圃に移植し，2004 年 12 月に個体番号‘14-18’を付して選抜圃場に定植した。2009 年に一次選抜し系統名‘オウトウ山梨 6 号’とした。その後，2010 年に二次選抜した。

2014 年，‘高砂’より 5~7 日程度前に収穫でき，着色良好で大玉であることから有望な系統であると認められ，品種登録の申請を行った。2015 年 3 月に出願公表され，同年 12 月に‘甲斐オウ果 6’として品種登録された。

品種の育成に関与した担当者および担当期間は次のとおりである。櫻井健雄(2002)，手塚誉裕(2002)，雨宮秀仁(2002~2008)，飯島光夫(2002，2007~2011)，富田 晃(2003)，竹下政春(2003~2006，2012~2014)，猪股雅人(2004~2006)，佐藤明子(2004~2009)，三宅正則(2007~2010)，新谷勝広(2009~2014)，竹腰 優(2011~2014)。

### 特性の概要

2009 年から 2016 年まで，‘甲斐オウ果 6’原木，高接ぎ樹および対照品種‘高砂’の樹体特性および果実形質を調査した。‘甲斐オウ果 6’高接ぎ樹は 2010 年に‘高砂’に高接ぎした樹で調査した。‘甲斐オウ果 6’原木は，2014 年に樹勢が衰弱し



第 1 図 オウトウ ‘甲斐オウ果 6’ の系統図

たため 2013 年までの調査値を用いた。‘高砂’は 1998 年に JA こまの選抜系より採穂し、切り接ぎにより増殖した樹で調査した。なお、全ての調査は山梨県果樹試験場圃場（標高約 440 m）のサイドレス雨よけ施設（硬質フィルム F クリーン固定張り）で行った。

### 1. 樹体特性

樹体特性に関する調査結果を第 1 表、第 2 図、第 3 図に示した。樹勢はやや弱、樹姿は開張である。対照品種の‘高砂’は樹勢が中、樹姿が直立であり外観が大きく異なる。節間長は短、枝の太さは中、葉身の長さは中である。花の直径は中、花弁の形は円形である。育成地での満開期は 4 月 8 日で‘高砂’より 1 日早い。収穫始期は 5 月 25 日で、‘高砂’に比べ 7 日早い極早生品種である。

成熟日数は 48 日である。また、交配親和性を示す S 遺伝子型は  $S_6S_9$  であり、‘高砂’をはじめ‘佐藤錦’、‘紅秀峰’など山梨県の主要品種と異なる。病害虫の発生は慣行の薬剤防除によりほとんど問題とならない。

### 2. 果実特性

果実特性および果実品質に関する調査結果を第 2 表、第 3 表、第 4 図に示した。‘甲斐オウ果 6’の果実の大きさは中、果形は心臓形、果頂部の形は凹であり、‘高砂’と似る。果皮色は赤であるが成熟が進むと赤黒い色調となる。果柄の長さは中、果肉の色はクリーム、果実の硬さはやや軟である。核の大きさは中で‘高砂’よりやや小さく、核の形は広楕円形である。果実重は‘甲斐オウ果 6’

第 1 表 ‘甲斐オウ果 6’ の樹体特性

品種名	樹勢	樹姿	節間長	枝の太さ	葉身の長さ	葉身の長さ／幅	葉身の長さ／葉柄の長さ	花の直径	花弁の形	満開期 <sup>z</sup>	収穫始期	成熟日数	S 遺伝子型
甲斐オウ果 6	やや弱	開張	短	中	中	中	中	中	円形	4/8	5/25	48	$S_6S_9$
高砂	中	直立	短	中	長	中	中	中	円形	4/9	6/1	53	—

<sup>z</sup> 2009～2013の平均値

第 2 表 ‘甲斐オウ果 6’ の果実特性

品種名	果実の大きさ	果実の形	果頂部の形	縫合線の明瞭度	果柄の長さ	果皮の色	果肉の色	果実の硬さ	果実の酸味	果実の甘み	果汁の多少	核の大きさ	核の形
甲斐オウ果 6	中	心臓形	凹	不明瞭	中	赤	クリーム	やや軟	中	中	多	中	広楕円形
高砂	中	心臓形	凹	無又は極不明瞭	長	赤	クリーム	やや軟	中	中	多	大	楕円形

第3表 ‘甲斐オウ果6’ の果実品質

品種名	台木	調査樹齢 (年)	果実重 (g)	糖度 (°Brix)	酸含量 (g/100ml)
甲斐オウ果6 (原木) <sup>z</sup>	自根	7~11	6.3	19.2	1.03
甲斐オウ果6 (高接ぎ樹) <sup>y</sup>	アオバザクラ /高砂 <sup>w</sup>	3~6	7.2	21.1	1.22
高砂 <sup>x</sup>	アオバザクラ	12~16	7.3	21.7	1.31

<sup>z</sup> 2014に樹勢衰弱のため、2009~2013までの平均値

<sup>y</sup> 2013~2016の平均値

<sup>x</sup> 2009~2016の平均値

<sup>w</sup> ‘アオバザクラ’ 台の ‘高砂’ に高接ぎした



第2図 ‘甲斐オウ果6’ の樹姿



第3図 ‘甲斐オウ果6’ の花



第4図 ‘甲斐オウ果6’ の果実外観と切断面



第5図 ‘甲斐オウ果6’ の結果状況

原木で 6.3 g と ‘高砂’ より 1.0 g 程度小さいが、高接ぎ樹では 7.2 g と ‘高砂’ と同程度となる。玉張りは良好であるが、玉張りが過度に良い果実はやや角張った形状となりやすい。糖度は原木で 19.2° Brix, 高接ぎ樹で 21.1° Brix と、‘高砂’ と同程度となり、極早生品種としては高い。酸含量は原木で 1.03, 高接ぎ樹で 1.22 と ‘高砂’ より 0.1~0.3 g/100 ml 低く食味は良好である。

### 3. 栽培上の留意点

‘高砂’ より早く収穫できる高品質な極早生品種として県内の各産地で栽培が可能であるが、成熟期が早いと早場産地での有利性が高いと考えられる。

樹姿が開張性で樹勢がやや弱いことから、剪定では強めの切り返しを行うことで、樹冠拡大や骨格の形成がしやすいと考えられる。新梢の発生は先端 2~3 芽が強く伸び、それ以降の芽は花束状短果枝となりやすいため、枝の発生が十分でない場合は、芽傷処理を行うと枝の確保がしやすくなる。

開花は既存品種より早いと、結実には貯蔵花粉の確保が必要である。花芽の着生は多く結実も良好であり、貯蔵の ‘ナポレオン’ による受粉で十分な結実が得られている (第 5 図)。また、満開後 30 日頃に生理落果が発生するため、着果調節を行う場合は生理落果の終了を見極めてから実施するとよい。双子果の発生は ‘高砂’ に比べて多い。花粉親の ‘豊錦’ に比べ軸が抜けにくいと成熟期後半まで樹上で果実を維持しやすい。一方で果実の成熟より先に着色するため、早どりに注意が必要である。

## 摘 要

‘甲斐オウ果 6’ は、2002 年に ‘紅てまり’ に ‘豊錦’ を交雑して育成した品種である。2009 年に一次選抜を行い、‘オウトウ山梨 6 号’ と系統番号を付与した。2010 年に二次選抜し、着色性、食味ともに優れていたことから、2014 年に品種登録の申請を行い、2015 年 ‘甲斐オウ果 6’ として登録 (登録番号第 24,629 号) された。

収穫期は育成地の山梨市江曾原 (標高 440 m) において 5 月中下旬で、‘高砂’ より 5~7 日程度早い。果実は心臟形で、果実重は 6~7 g 程度と極早生品種としては大きい。糖度は 20.0° Brix と高く、酸含量が ‘高砂’ より低いことから食味は良い。着色は良好で成熟が進むと濃い赤色となる。また着色先行であるため、適期収穫に努める。樹姿は開張で樹勢はやや弱い。

## 引用文献

- 1 富田 晃 (2009). 山梨県におけるオウトウ栽培の現状と課題. 第 2 回サクラノボ研究大会「未来にむけて」. 21~31.
- 2 富田 晃・雨宮秀仁・猪股雅人・手塚誉裕・菊島昭子 (2011). オウトウ新品種 ‘甲斐オウ果 1’ の育成. 山梨果試研報. 12:21-26.

# New Cherry Cultivar ‘Kaiouka6’

Katsuhiko SHINYA, Yoshihiro OTA, Yu TAKEKOSHI<sup>1</sup>, Hidehito AMEMIYA, Akiko SATO<sup>2</sup>,  
Masanori MIYAKE<sup>2</sup>, Akira TOMITA and Takahiro TEZUKA

*Yamanashi Fruit Experiment Station, Ezohara, Yamanashi 405-0043, Japan*

Current address:

<sup>1</sup>Yamanashi Agricultural Academy, Hokuto Yamanashi, Japan

<sup>2</sup>Yamanashi Kyoto Agriculture Office, Koshu Yamanashi, Japan

## Summary

‘Kaiouka6’, originating in 2002, resulted from a cross of ‘Benitemari’ and ‘Yutakanishiki’. Since the coloring and fruit quality were superior during the secondary selection, held in 2010, the cultivar was submitted as a new cultivar in 2014 and registered as ‘Kaiouka6’ (registration No. 24,629) in 2015. Harvest time was from the middle to the end of June in Ezohara, Yamanashi City, at an altitude of 440 m, which is five to seven days earlier than that of ‘Takasago’. The fruit is cordate and, although a very early ripening type, is large, weighing around 6 to 7 g. It is flavorful because its soluble solid content is high, at 20°Brix, and its acidity is lower than that of ‘Takasago’. Its coloring is good, with mature fruit becoming dark red. Optimum harvest is important so that fruit coloring is achieved earlier prior to ripening. Its tree habit is spreading, and the tree vigor is somewhat weak.